

[研究ノート]

20世紀前半期における モンゴル定住地域のイヌの諸相

原 山 焯*

はじめに 「赤い夕陽の満洲」に吠える「蒙古犬」

明治・大正期の代表的な詩人としてよく知られている北原白秋（1885－1942）が「鄭家屯」という詩を残している。

赤い入日に
吼え立る
犬は大きな
蒙古犬。

ここは満洲
鄭家屯,
低い土屋根,
土の家。

広い沙漠が
さむいのか,
遠い榆の木
うごくのか。

*本学文学部

キーワード：モンゴル，イヌ，ウラーン・バートル，旅行記

赤い入日に
照らされて
屋根で吠えてる
蒙古犬。

この作品は、この詩人の、『少国民詩集 満洲地図』という書におさめられている（北原 1942：150-151）。同書「巻末記」のなかで著者は「満洲建国十周年慶祝記念として」、満鉄本線支線の駅名をタイトルとする詩を収録したと、その趣向を述べている。この詩に白秋が表した感慨は、モンゴル地域、より広くは当時独特の言葉であった「満蒙」（だいたいにおいて、現在の中華人民共和国の内蒙古自治区東部と東北三省に相当する地域の呼称。以下「」を省略する。この種の歴史用語については初出の際「」を付すが、次出以降はこれを省略することとする。引用文中に現れた場合には「」を付さない）といわれる地域に旅した人の多くが共有するものでもあっただろう。番犬として、わがもの顔にその存在を主張する恐ろしいイヌは、「赤い夕陽の満洲」（以下「満洲」の「」を省略）という相当に陳腐化した大陸イメージとともに、その地の情景を代表する絵柄のひとつだったといえる。

「屋根で吠えてる」という一見不審な表現については、1917年、上海商務印書館から刊行された『清稗類鈔』に明快な説明がある。清一代の稗史（巷間の逸話や時の風俗などを筆記したもの）を多岐にわたって採録したこの本のなかにモンゴルのイヌについての記事があるのだ。モンゴルにおける「舎」（モンゴル語でバイシンといわれる固定家屋。つまり遊牧民が多く住むテント住居ーゲル。包ともーではない）は、屋根が「露台」のように平らで、そのような家に住む人は、昼間門外に番犬としてつないでおいたイヌを、夜には放す。解き放たれたイヌは、その平らな屋根に登って吠えたてるといふ。白秋が見たのは、まさにそのような情景であったにちがいない。1930年代、満蒙の事情によく通じたある愛犬家も「蒙古人は犬を屋根で飼ふと云ふ人が有るが、実は此蒙古のグレーハウンドは身が軽く、よく一丈位は飛び越し、

20世紀前半期におけるモンゴル定住地域のイヌの諸相

其雑種でも七尺位の土堀の上に昇って寝て居るのを見受けるし、屋根にも平気で飛びあがって寝て居る。未知の人を見ると屋根上で吠え立てて居るので、此を見て殊更屋根で飼って居ると見るは、少々認識不足と言はねばならない」と指摘している（高久 1932：15）。

白秋の詩の題材にとりあげられ、高久に言及されたイヌは、草原の遊牧民居住地域で番犬の役割をはたしているイヌではなく、モンゴルはモンゴルでも、漢民族がはばをきかせている定住地域にいるイヌである。

満蒙地域にいるイヌについては、その地域の主要な生業である牧畜に従事するイヌの存在がよく知られており、紀行文などにもさかんに登場するが、定住地域のそれについては、あまりよく知られていない。しかし、この種のイヌのありようを探ってみると、イヌが本来もっている一種独特の性格がよく窺えるように思える。

筆者は、かつてモンゴルのイヌについて、歴史資料に現れた意義を考えたことがある（原山 1991）。本稿では、近現代のモンゴルに重点を置いて、その地におけるイヌの諸相を考えてみたい。ここで、「遊牧の国」モンゴルについて語っているのに、草原地帯ではなく、あえて集住地域のイヌに問題を限定したのは、上に述べたような見地からである。

第1章 満蒙の集住地域にいる蒙古犬

戦中期、「日蒙親善」のために組織された国策機関善隣協会が刊行した啓蒙用の小冊子『蒙古とはどんな処か』（善隣叢書第1巻 同協会発行 1934：42）にはモンゴル人の特徴として「畜犬を愛する」という項目があげられている。そこには次のように述べられる。

蒙古人が家畜を愛することは前にも触れておいたが、彼等は亦猛獣や盗賊の被害を防ぐ為めに番犬として、多きは数十頭、少なきも四、五頭の蒙古犬を飼養して居る。主として家畜愛護の為めの番犬であるから、之を大切にする事は云ふ迄もない。

旅行者が軽率に之を鞭打ったり、或は投石したりすると彼等の感情を非常に害し、甚しきは全部落民が、徒党を組んで復讐して来る様な事態さへ惹起することがあるから、よく注意しなければならない。

ここにいう蒙古犬は、文脈から見ると遊牧生活を専らとする草原地帯におけるイヌであろうが、特に治安が定かでない30年代においては、定住地域の番犬としても、不可欠の存在であったことだろう。その役割によせられている信頼感は実に長い伝統をもつ。先にもふれた『清稗類鈔』の「動物類」にも関連の記事が見える。訳出しておこう。

内蒙のイヌは大きいこと犢のようで性質は猛々しく、鳴き声はウシのようである。「撻子狗」と俗によぶ。漢人の商人がよく飼っているが、日中は鎖でつながれ、夜にはこれを放って門戸を守らせる。たいいてい盗賊はあえて近寄ろうとしない。

体格が雄大で、性あくまでも獐猛なその地のイヌが、「番犬」の役割を期待されたことがよくわかる。『清稗類鈔』より古く、19世紀はじめ清人の西清によってあらわされた『黒竜江外記』によれば、この地方の人家では盗難予防のため多くは5、6頭もイヌを飼うという。そのイヌは容易に人に馴れようとせず、見ただけでも強そうで、盗賊はこれを非常に恐れる。深夜その吠え声はあたりの城まで響く。白昼そうした人家の門前を通るときは、噛みつかれる危険があるので棍棒をもって歩くという（西清 1943：195）。

フルンボイル（漢字では呼倫貝爾と表記される。フルン、ボイル西湖より来た呼称で、興安嶺西側のモンゴル国国境までの地域をさす）の中心都市のひとつである通遼で、蒙古犬について語り伝えられた話がある。「子牛程もある此の犬は此の通遼でも王様株ださうで、時々子豚をくわえて来ることがあると。町の中を歩いて居る子豚こそ災難だ」（東亜同文書院 1932：445）。モンゴルのイヌの大きさと獐猛さを十分に裏付ける話ではないか。ほぼ同時

20世紀前半期におけるモンゴル定住地域のイヌの諸相

期、1932年夏に1ヶ月間、守備隊として駐屯していた旧日本軍兵の回想によれば、37回の「敵襲」を受けたが、そのたびに「必ず部落の野良犬が囂々と一斉にコーラスをやる。すると程経ず四方八方から敵が肉薄して来る」という展開になったという（藤村 1936：18）。社会状況が不安定な状況下で、住民やそこにいる人たちに危険の切迫を告げるのは、なにも飼い犬に限ったことではなかったのである。

「満洲国」時代、ハルビン（哈爾濱）学院の俳句同好会黒水会の会誌『韃靼』の同人であり、「北満俳壇」の地位向上に努めた野島一良（ホトトギス同人）は、1934年に「楊柳村土壁めぐらせ犬多し」という句をものしているが、この句などはまさに前述した北原白秋の詩の描写と軌を一にするもので、当時のその地の情景を見事に切りとっている（小沼 1988：172）。

そのような社会状況のなか、イヌの役割がなかなか有効であったらしいことは、イヌによって警護されていた家や施設を、良からぬ目的をもって狙っている者どものイヌを指す表現からもくみとることができる。満洲国時代、ハルビンの最下層の人たちが蝟集するといわれた傅家店のスラム街のただなかに、簡易宿泊施設大観園があった。そこでの満洲国警務総局の調査によれば、「匪賊」を生業とする者たちのイヌをあらわす隠語は、「皮子」（皮っきれとでも訳せようか）であった。そのあたり一帯では、イヌ（ヤネコ・ネズミなど）の毛皮を「皮作坊」とよばれる皮の鞣工場が収買し、こうした「碎皮子」（細々で雑多な皮）を「鞣した上、沢山継ぎ合せて八寸四方大の毛皮」にして売るのである。イヌを毛皮原料と見るのは、別稿でも詳しく述べるように、満洲国一帯では普通のことだったが、そのことをふまえて、匪賊たちは行く手をさえぎるやっかいなイヌを「皮のきれっぱし」と罵ったのであろう（満洲国警務総局 1982：228）。満洲国地域における「関東馬賊」たちは、「皮子」を「警察」の意で用いており、またかかると面倒なことになる「巡警」は「狗子」と呼んでいたというから、こうした隠語は「馬賊」のあいだでも一般的であったらしい（田・高 1992：54）。

さて、いま引用した善隣協会の手になる文章には、ほかの多くのモンゴル

のイヌについての見聞にも同様のかたちで現れる、定型句的な描写が見られる。複数のイヌを飼っていること、そのイヌは大型で番犬としてのすぐれた価値を持っていること、したがって、鞭をふるったり石を投げたりしてこれを防がねばならないほど獐猛である、ということなどである。こうした現象はモンゴルにおいてだけ見られたものではなく、満洲国や「北支」の農家に飼われているイヌは非常に獐猛で、農家を訪問するときには、「看狗！看狗！」と叫んでその家の者が制止してくれてからはいるという類似の習慣があるという（春山 1940：260）。

牧畜がさかんな地域に隣接する都市に眼を転じると、さすがにもっと露骨な形でイヌのありようを見ることができる。1941年ころ、フルンボイルの主要都市であるハイラル（海拉爾。遊牧地域と農業地域との接点として古来交易などで栄えた）は、野犬問題に悩まされていた。ハイラルを訪れた人は、その地の有名な寒さより、野良犬の多いことに驚かされたという。市民もしばしば野犬の被害を受け、市の当局も機会あるごとに野犬狩りをおこなうのであるが、到底その旺盛な繁殖力に追いつかないというのであるから、これはただごとではない（『満洲日日新聞』1941年6月2日）。

野犬がはびこる原因については、さまざまな見方があったが、食料品が無造作にすてられ、それが跳梁する野犬をますます増加させるという指摘もなされている。このころのハイラルでは、そろそろ物資不足が起こりはじめ、食料品の消費も規制され、労働者の一部に対しては特別配給の措置もとられていた。野犬狩りもさることながら、物資愛護を徹底すべきである、それが野犬を減らすことにもつながるという趣旨である。節儉生活のキャンペーンと野犬禍が巧妙に結びつけられているのである。

これをさかのぼること30年まえ、明治44（1911）年夏の大連でも同じ問題がもちあがっていた。野犬が増え、その害がはなはだしいので、市当局は撲殺を開始した。

その対処が功を奏し（すぎ）たということになるのであろうか、2年後の11月には、今度は、撲殺という過激な取締り法に抗議する人たちの間で畜犬

20世紀前半期におけるモンゴル定住地域のイヌの諸相

保護会が結成されている。同会は市当局に、撲殺はなるべく避けて網などを用いて捕獲し、一定場所において処置すべきこと、やむをえざる撲殺は、登校前、人出の多くないときにおこなうべきこと、官において畜犬死体埋却場を設置すべきことなどを申し入れている（『満洲日日新聞』1913年11月16日）。

イヌが撲殺されるときに、まわりにいる人の心中に生じる葛藤については、日本敗戦直後に書かれた望月義の小説『グライノール』になまなましく描かれている。グライ湖とはフルン湖の別名で、この小説はフルンボイルを舞台としている。ここに駐屯していた日本軍のある中尉が、イゴールという名の、クマさながらの黒い長毛にふさふさとおおわれた、いかにもおちついた面だましの部落一の大きいオスのイヌを無理矢理に徴発する。そのイヌのすばらしい毛皮を欲しかったからであった。いやがるイヌは、「ずるずる馬にひきずられていた。シリと前足でつっぱりながら、右に左によろけてはころがった。たってはころがる」。こうして兵舎に連れこまれたイヌは、なんにんがかりでも撲殺することができず、ピストルで頭部に銃弾を3発うちこんでようやく殺すことができた（望月 1948：49）。

あとで詳しく紹介することになる満蒙産イヌ皮の大集散地として広く知られた錦県においても、野犬の跳梁という事態がおこっていた。「県域内外市街地に於ける畜犬約二千頭と称し、所謂野犬を加算すれば一万頭を越ゆる事多きものと想定せられ、市街至る所に獐猛なる野犬彷徨し夜間の危険を感じる程にして、又咬傷せらるるもの少からざるに依り、[大同]元年九月関係者種々協議を重ね、暫定畜犬規則を発布し、畜犬を制限すると共に野犬を撲殺する事としたるも、一步県城を出でて農村に入れば、畜犬は一つの武器にして欠く事を得ざるものなれば畜犬令は域内外に止め」という。こうして大同元年10月1日施行の全19条（付則2条をふくむ）よりなる「畜犬取締規則」として法的措置が施行されたあと、届け出のあったイヌは1,366頭であった。このことを受けて2年2月からは一部野犬の撲殺を開始したが、十分の成果はあげられなかった。撲殺の対象となったのは、狂犬病にかかった、あるいはその疑いのあるイヌ、所定の「犬牌」をつけていない野犬と見な

されたイヌ，人畜を咬傷したイヌなどであった（満洲国実業部農林司 1933：57-60）。

1. ウラーンバートルのイヌ事情

オルホン川の支流トラ河のほとりに位置するモンゴル国の首都ウラーンバートルの起源は、17世紀までさかのぼる。1898年、この街を訪れたフィンランドの世界的な言語学者グスタフ＝ラムステッド（1873-1950）の表現をかりると、「トーラ谷の上にそびえる山々の南側に形成された砂礫台地にある」（ラムステッド 1992：51）。この地は、黄帽派の転生ラマ（活仏）として、モンゴル全域のチベット・モンゴル仏教教徒のあつい尊崇を集めたジェブツンダムバ＝ホトクト（哲布尊丹巴呼図克図。庫倫にいた活仏の法号）が坐牀した場所であり、それがきっかけでこの街は、いわば門前町として形成されはじめる。それまでは移動を続けていたジェブツンダムバの寺院が、18世紀になって現在の地に定着したのである（松川 1998：72）。もともとはダー＝フレーあるいはイフ＝フレー（ダーは中国語、イフはモンゴル語で「大」の意、またフレーはモンゴル語で「囲墻」の意）などと呼ばれており、それを音訳して漢字では「庫倫」と表記された。クーロンという呼び名はそこからきている。ウルガという呼称もよく知られているが、これはもっぱらロシア人をはじめとするヨーロッパ世界からする名称であり、モンゴル語のオルゴ（宮殿の意）に由来する。この地では、早くからロシアとの通商がおこなわれ、それにともなって市街は拡充していった。18世紀中ごろよりは、清朝の辦事大臣も駐在することとなり、ますますさかんになる交易に従事する漢民族の商売人たちが居住する買売城（マイマイチェン）も隣接地にできあがった。

この街について、有名な探検家スウェン＝ヘディン（1865-1952）は1923年の見聞として次のように表現する。「ウルガは美しい町ではない。それはトラ河畔に単調且つ平面的に横たわっている、そして木や粘土や煉瓦でつくられた低い家は大体同じ格好をしている。……新しい街路の二三のものは実

20世紀前半期におけるモンゴル定住地域のイヌの諸相

に広いけれども、古い町の少路は狭い」(ヘディン 1939:134)。それより約10年前のウルガの様子を伝えているロシアの外交官イヴァン＝ヤコーブレヴィッチ＝コロストウェッツによれば、この街は四部分からなる。第1は、セルベ河が貫流している街区、ここには「支那人やロシア人の商店や家屋、市場、官庁及び活仏の居館がある」。第2はガンダン寺を中心とする宗教施設の建ち並ぶ丘陵、第3はロシア領事館、第4は「支那の商業都市、買売城」である。うち「支那人は計画的に建設された市区に住んで」おり、「無計画的に散在しているロシア人の木造小屋に対して引き立って見える」と。そして「草原の埃がひどい上に植物が全く無いため何処を見ても灰色」などといひ、ヘディン同様あまり好意的ではない(コロストウェッツ 1943:240-241)。またこの街は、サハリン南部に相当する高い緯度、1,500メートルもある海拔、などの諸条件により、冬の寒さは特段に厳しい。だが、北京からモスクワに至る国際列車の主要な停車地であることからわかるように、いまもこの街は要衝であり続けている。

さて、このモンゴルきっての都市には、かつて、恐ろしいイヌがつきものであった。実に多くの訪問者がそのことを記録している。次にそのいくつかを見てみたい。

まず、1870年、ロシア帝国の軍人にして著名な探検家のニコライ＝ミハイロヴィッチ＝プルジェワリスキー(1839-88)によるこの街の記録を見てみよう。「内陸アジアの自然の最初の探検者」という墓誌銘をおくられたかれの生涯は、あまりにも有名である。かれの証言によれば、この街の郊外ほど遠からぬところにある窪地においては、死体は埋葬されることなく、むきだしのまま放置され、イヌと猛禽類のむさぼり食うにまかされていて、そこそこに積み重なった人骨の間を、食人犬の群れが影のようにさまよい歩いているという(プルジェワリスキー 上 1981:20)。

約20年後、1892年の訪問者である著名なモンゴル学者アレクセイ＝マトヴェーヴィッチ＝ボズネーエフ(1851-1920)は、この鬼気迫るようなありさまの背景をもうすこし詳しく述べている。普通死者があれば、その屍を襤褸

で包み、街の外のフンズイというところに運んで、地面にじかに放棄する。こうした死体は、長く人目にさらされて悪臭を放つということはなく、人目にふれることさえ稀である。というのも、遺骸を運んできた人たちが去るやいなや、ここの谷あいには点在する穴から野犬の群れがあらわれて、包みを食い破ってことごとく肉を食らい、あとには白骨がわずかに残るのみということになるからである（ポズネーエフ 1908：195－196）。

この場所は、前述したプルジェワリスキーのいう「窪地」と、おそらく同じであろう。1908年に、庫倫を訪れた大阪毎日新聞記者竹中清（翠村）は、この場所が「樹木鬱蒼として昼猶暗く物凄いとこ」で、「数百年来の白骨が累々として谷を埋めて居る」と報告している（竹中 1909：164－165）。竹中は、なお「庫倫方面では毎年二三名はキット猛悪なる蒙古犬に噛み殺されるものがあるさうだ」と言及する（同前）。

死体を棄てさるという点だけからすると、きわめて乱暴に見えるこうした葬送のやりかたは、風葬・鳥葬などといわれる葬送儀礼であって、今なお一部の採集狩猟民や牧畜民のあいだにおこなわれている習俗である。死体を自然に腐敗させたり、禽獣によって喰われることによって処理しようというものである。棺におさめることもあるが、そうでない場合は、異文化の者には死体を遺棄しているだけにしか見えないかもしれない。

ポズネーエフと同じ1892年、大日本帝国陸軍軍人の福島安正（1852－1919）も、この地のイヌに言及している。福島は、ベルリンから厳冬期のシベリアを単騎横断したさいに、この街を通過したのであった。『大阪朝日新聞』は、西村時彦（天囚）による福島からの談話聴取をもとに、120回にわたって旅行記を連載した。それをまとめて『単騎遠征録』と題されたこの本は、当時公刊されたあまたの類書中、もっとも浩瀚、詳細なものとなっている。

福島は、この旅行記のなかで、この街のイヌが人に吠えかかるのは、人を怪しんでというだけでなく、「人肉の味を知りて、垂涎措かず、直ちに其の肉を啖はんとする」からだとして述べている（西村 1894：199）。かれのいうように、チベット・モンゴル仏教の信仰があつかったモンゴルにおいては、通

20世紀前半期におけるモンゴル定住地域のイヌの諸相

例死者は、荒野に遺棄され、禽獣（このなかにイヌがふくまれるのは当然である）の喰らうに任せたのである。多数の人が集住する区域においては、おのずからその目的に供される場所も定まっておき、したがって屍肉が安定的にもたらされることにひかれた野犬がたむろするのは、むしろ事の当然のなりゆきであった。

前述した1898年の訪問者ラムステッドは、この街にいる「おびただし野犬の群れとその吠え声」について言及している。ウルガの街には「空き地には大小のごみの山があり、そのまわりを黒い犬がうろついている。犬はわが国のラップ犬によく似ているが、やや大型で毛が多い」。それらのイヌのありようについて、あるロシア人は「ウルガの住民は、大滝の轟きのような絶え間ない犬の吠え声を聞かないと安眠できないのさ」と語ったという（ラムステッド 1992：41）。当時のこの街の「一種独特の雰囲気」が読みとれよう。

1919年には、イヴァン＝ミハイロヴィッチ＝マイルスキー（1884－1975）にひきいられたモンゴル調査隊がこの街を訪れている。全ロシア中央消費組合連合会（ツェントウルソユーズ）が、モンゴル肉の輸出を担当することになったときに、それにさきがけてモンゴルの産業・社会・政治・風俗などを調査することが決せられた。1919年から1920年にかけての同調査隊の隊長を委嘱されたのがマイルスキーである。このときの調査報告は、革命前のモンゴルについての貴重な資料として知られている。

マイルスキーが訪れたときのこの街は、「市中を徘徊する無数の犬は大なるもあれば小なるもあり、従順なるものもあれば獐猛なるもあり、毛深きもあれば脱毛して禿げたるものもある等種々様々にて、或は骨を嚙り或は日向に眠り、又腐敗しかかった犬の死骸は幾十ともなく墻の辺りや橋の下、広場の真中と処きはらず横たはり、到る処塵芥、泥土、糞便等は山と積まれ、悪臭真に堪へ難い処」というありさまであった。訪問者には、群れをなすイヌがいやおうなく目についたことが、嫌悪感にみちた文章からうかがわれる（マイルスキー 上 1927：249）。

マイルスキーは、上述したウルガの墓地ともいうべきこの場所に、しばしば老耄した年寄りや治る見込みのない重病人など、「生きた死骸」が酷薄な家族らによって運びこまれることさえあるという。そうだとすればなおのこと、人肉嗜好の野犬が集まってくることになる。「まだ呼吸の通って居る」ヒトを襲うイヌは戦場においても見られた。旧日本軍の満洲従軍者の回想談を紹介しよう。戦傷して敵に出くわした「某騎兵」は、「前には敵匪を控へ腹背には恐ろしい野良犬の牙に襲はれ、同君は不幸足の肉を喰ひ切られ」という身の毛もよだつような体験をしている（藤村 1936：19）。

さて、いまから百年すこし前のウルガにおけるこうした凄惨な情景は、近くにあるロシア領事館の二階の窓よりしばしば目撃されたのである。ちなみに、ウラーンバートル北郊にあるこのフンズイ köndeï は、モンゴル語で「谷」「洞穴」を意味する（内蒙大蒙語研 1999：694）が、その付近には、第二次世界大戦後、捕虜としてモンゴルに連行・抑留され、望郷の念のうちに異国にはた日本人的墓地があり、息絶えた戦友を埋葬に来たいくたりもの人が、やはりこうした情景を目撃している（春日 1988：128）。

2. イヌに噛み殺された人たち、危うく難を逃れた人たち

こうした習慣は、当然ながら、大きな問題点をその地に住む人たちに突きつけることになる。それは、人肉の味を覚えた多くの野犬がたむろするので、近辺を通行することが危険となったことである。死者はいうにおよばず、瀕死の老病者が生きながらにむさぼり食われるだけでなく、普通の住民、いや頑健な人までもが不幸な事故に再三まきこまれた。

ポズネーエフは、1871年ロシア国民たるブリヤトの婦人が、馬に乗って通りかかったさい、馬からひきずりおろされ噛み殺されたと、何人ものロシア人から聞かされた。前記竹中によれば、哀れなその婦人が災難にあったのはフンズイ付近であったという。竹中はその話を「ツイ近頃」と紹介しているから、その地では大きな話題として何年にもわたって語り伝えられていたのであろう（竹中 1909：165）。

20世紀前半期におけるモンゴル定住地域のイヌの諸相

1919年、マイルスキーの調査に同行したザバイカル出身のコサックは、モンゴルを再三訪れていたが、凄惨な体験談を語っている。数年前、そのコサックが友人とともにウマで庫倫の郊外に出たとき、少し前を歩いていた漢人が、小さな丘の向こうで見えなくなった。その丘の上にかれらが達したとき、はるか下の方でイヌが群がっていた。その様子がただごとではないので、そこに行ってみると、くだんの漢人がイヌに引き裂かれ喰われているところだった。小銃が発射され、そのイヌはようやくおっぼらわれたという（マイルスキー 上 1927：169）。

1926年、ユーリー＝ニコラエヴィッチ＝レーリヒ（1902－60。ジョージ＝レーリヒとも名乗る）も、次のような話を聞く。レーリヒは、1920年代、父ニコライ＝レーリヒとともに、ニューヨーク＝レーリヒ美術館理事会が後援する「レーリヒ中央アジア探検隊」に加わり、内陸アジアを旅したのである。さて、かれが聞いた話とはこうである。ある騎兵がライフル銃と剣を装備していたにもかかわらず、夜間、腹をすかせた野犬の群れの襲撃を受けた。かれは全力で闘い、何頭ものイヌを殺しはしたものの、衆寡敵せず、ついに力つきイヌどもにむさぼり食われた。翌朝発見された遺留品は、ライフル銃と剣、コートの切れはしだけだったという。切れ切れに引き裂かれたかれの帽子、長靴、弾帯などが、殺人犬どもの暴威を余すところなく示していたと（レーリヒ 上 1985：180）。

1930年、M・ローゼンフェルドは、馬から獰猛なイヌたちによってひきおろされ、装備したサーベルで果敢に闘い、凶暴なイヌを切りまくったが、ついに殺されてしまった歩哨の話を目にする。これは、ひょっとするとレーリヒが聞いたのと同じ事件かもしれない（ローゼンフェルド 1940：48）。

この街には、殺されないにしても、イヌに死ぬほどの恐怖を与えられた人たちのエピソードもたくさんある。

1892年、この街を通過した福島安正が聞いた話を紹介しよう。銃を携えて狩猟に出たブリヤト商人が、吠えかかる数十頭のイヌに包囲された。危険を感じ、木の上のほったくだんの商人、樹上から銃を発射し数頭を倒したが、

群犬は退散せず、なおも牙を鳴らして吠えかかる。かように進退きわまった状況で一昼夜がたったとき、おりしも通りあわせたモンゴル人たちの葬列が運んできた新しい屍体にひかれてイヌどもがついていったことでようやくして難をのがれたというもの（西村 1894：200）。

またマイルスキーによれば、酔狂にもこの「墓地」を見物しようと思いついた一人のブリヤト人が、馬に乗ってその場所に行ってみたのだが、四方から飛びだしてきた大きな人喰いイヌに襲われ、危ういところをピストルをぶっばなしながら活路をひらき、ようやくにして生還したという。マイルスキーの補佐役も、「墓地」の付近を通過したとき、「人喰犬」に襲われ、ウマの胸にまで跳びかかるイヌの頭を鞭で打ち叩いてようやく危険を脱したと（マイルスキー 上 1927：169）。

マイルスキーは、この種の、人を襲う野犬が「墓地」周辺にだけにしか出現しないことは、まだしも幸いであるといい、さもなくばこの街は歩くことも真に危険なことになるだろうと付言しているが、多くの記録のなかには、この街の市街地区でも被害に遭う例があったことを告げるものも散見される（同前）。

1919年、大阪朝日新聞記者中平亮は、成立まもない「大擾乱中の」「世紀の大謎国」「赤色露国」潜行取材を命ぜられ、モスクワ入りに成功し、混乱のなかにも「労農体制」を整えつつある同国の状況を「死生の境出入して得たる労農露国の真相と其の実験とを伝へた」のである。同書中には、中平が1920年7月中旬ウルガを通過したくだりを載せる。「庫倫の今一つの特色は、野犬の多いことである。いくら後から後へと往来に糞が溜っても此の多数の犬公の腹を満たすには足らぬ。その上蒙古の習慣として死人を野に捨てるので、犬は人を食った覚がある。それが為に気が荒く、ステキなしでは通行が出来ないとは物騒千万だ。市外へ一歩踏み出すと、人間の髑髏や肋の骨は累累として横はり、諸処に野犬の群れた生々しい屍体が転がっているのを見ては、食人種の中へ踏み込んで来たやうに物凄い。死人を大切に為さないのも程がある」と驚き、かつあきれている（中平 1921：287-288）。

20世紀前半期におけるモンゴル定住地域のイヌの諸相

それよりすこし後になる1922年、モスクワで開催された第一回極東民族大会に片山潜、徳田球一らと参加しての帰路、この地に立ち寄った鈴木茂三郎（1893-1970）も中平同様、ウルガのイヌから強烈な印象を受けることになる。夜間勝手のわからぬ異郷の街頭で、悪名高い「蒙古犬」の野犬の集団に遭遇するのだから、こちらのほうはずっと深刻である。「行く手に一団の黒い塊が動いたかと思ふと、地殻を破って地雷火が爆発したかのように、蒙古犬の野犬の群れが、牙と爪を鳴らして一斉に吠え立て、（中略）後ろにはさっきからの野犬がまだ五六匹暗闇に眼ばかりを光らせている」と（鈴木1923：312）。いささか古風な表現ではあるが、まことに生々しい恐怖が伝わってくる記述である。

数年後の訪問者レーリヒも「毛むくじゃらの大きな黒い動物、野良犬の大群が通りに徘徊し、しばしば人を襲う」といい、さらに「市は犬から解放されず、野犬は今も広場や通りに横行している。彼らはひどく凶暴で、夜間連中がたむろするごみ山のそばを通るのが危険なこともある」と報告している（レーリヒ 上 1985：180）。

3. モンゴルのイヌの特徴

獐猛なモンゴルのイヌが話題になるとき、非常にしばしば「黒い」と「毛むくじゃら」であることが指摘される。四つ目、つまり眉毛にあたる部分の色が白や薄色であるといわれる場合もある。こうした特徴をもつイヌは、モンゴル語でドルブン＝ニドゥテイ（＝ノホイ）dörben nidü-tei (noqai)、「四つ目（のイヌ）」と呼ばれる（内蒙大蒙語研 1999：1210。「四眼狗」）。

番犬は黒いのかぎるとは、紀元1世紀、ローマ帝政期に『農業論』を著したコルメラの言にもある。コルメラは、侵入者に恐怖を与えるには、「とどろきわたる声で吠え立てる威風堂々とした容貌のものを選ぶべきである」といい、さらに「毛色は全身同じ色であるべきで、牧羊犬としては白毛が、農場の番犬としては黒色が望ましい」というのである。そして「何色かが混ざったものは、このどちらの使役犬にも薦められない」と念をおす。牧人が

白いイヌを好むのは、オオカミとはっきり見分けが付くからだといい、農家の番犬は「人間の悪賢さと対抗しなければならない」から、「もし黒色であるなら、光り輝く陽光を身に浴びたその姿に、相手は戸惑いうろたえるばかりであろう」と、その理由を述べる（今泉 2000：168）。古代ローマの人たちと、本稿にかかわる地域とでは、そのそれぞれの感覚について同日に論じられないであろうが、以下の体験談を見ると、洋の東西をこえて、あい通じるものがあるような気がする。

さらに、色彩イメージという観点から見ても、番犬の毛色が黒いということは、望ましいことだったろう。多くの文化圏においてそうであるように、モンゴルにおいても黒という色は、「不吉な色と見なされ」、衣服などでもその色を注意深く避けられるのが普通であった（Jagchid & Hyer 1979：158）。その対極にあるのは、白であったり、チベットから仏教が流入してきてからは黄色であったりもした。チベット・モンゴル仏教のもとでは、ハル＝フン（黒い人）は俗人、それに対してシャル＝フン（黄色い人）は僧を意味するのはよく知られているし、黒い心といえば、害心を抱くことを意味した（モスタールト 1966）。このように黒という色は、マイナスイメージをたっぷり含んだ色ではあるが、他方、「猛烈な」とか「激烈な」、さらには「洗練されない」「粗い」「粗野な」、「俗的な」、「大きい」「重い」などという多様な意味を持っている（内蒙大蒙語研 1999：583, Lessing 1960：931）。チベット起源でありながら、モンゴルで圧倒的な人気を博し、独自の物語世界を完成させていった英雄叙事詩ゲセル物語では、主人公である天降った英雄ゲセルの武器は、「露ときらめく漆黒の鎧」「黒い剛弓」「長さ三尋の黒い鋼鉄の宝剣」であった（若松 1993：59）。まがまがしいまでの性能を発揮すべき軍装の色は黒こそがふさわしい。好ましからざる訪問者に、初手から恐怖の念を与えるためには、外見的には、夜陰にまぎれやすく、昼間でも表情を見定めがたい黒色の体毛（黒の意味には「曖昧な」「不明瞭な」というものもある。Lessing 1960）が、また心理的（文化的）にもいま述べたような意味を重層的に持つ黒という色が最適であったろう。

20世紀前半期におけるモンゴル定住地域のイヌの諸相

1938年、京都帝国大学旅行部のメンバーからなる内蒙古学術調査団（団長は理学博士木原均）の一員として、ウジウムチンでモンゴルのイヌを見た宮崎武夫は、次のように記録している。「不便至極の蒙古奥地に住んでいる蒙古犬にしても御多聞に洩れず純粹の蒙古犬は今日ではすでに少く、吠え立てて我々に詰め寄ってくる犬達も、そのほとんどがこの雑種組である。背丈はそんなに高い方ではないが、毛深く、両眼の上に茶色の斑点があつて、いわゆる四つ目になっているのでその外貌を一層もの凄く見せている。この点は雑種ながら大体一致しているようである」（宮崎 1943：244）。

また、1944年11月、磯野富士子は貝子廟（現シリント）のバンディト＝ゲゲン＝スムで、はじめて「対等の立場で」モンゴルのイヌを見た感想を述べている。大きさは中くらいのセッターほどのイヌたちは、「両方の眼の真上には黄色い毛が丸くかたまつていて、ちょっと四つ目のように見える」という。磯野は、「犬よけにと拾ってきた棒をしっかりと握つて」、夫君磯野誠一に遅れないように歩いたと（磯野 1986：21）。

磯野夫妻らとともに、張家口にあった西北研究所で青年時代を過ごした梅棹忠夫もやはり、モンゴルのイヌの外見的特徴について、「毛並はすべて黒褐色で、目のうえに褐色の斑点がある。いわゆる四つ目である」と概括している（梅棹 1991：193）。

1990年代、アウトドアにかかわる著作を多くものして若者たちにひろく支持された椎名誠は、モンゴルを題材にした映画『白い馬』（1994年）を制作・監督し、またそのさいのモンゴル体験を著書にもしている。椎名はそのなかで、モンゴルのイヌにもふれ、「犬そのものは黒くて大きくて、むかしの公家さまのように目の上に白い斑点がふたつくつについて」と述べて、さらに、それらのイヌは「番犬だけの役にしかたたないので」「あまり可愛がられていない」という（椎名 1995：173）。

それより約百年前の19世紀の末期、福島安正は「其の色盡く黒く眉毛は茶色なり。蒙古至る処無数の犬を見る。白犬は僅に三四頭に過ぎず」というが、これまた、まさに四つ目の猛犬である。福島をはじめ、その後の訪問者たち

の眼には、そのイヌのほとんどがすべて黒と映ったのである（西村 1894：199）。

4. 養われるウルガのイヌ

人間が棄てたさまざまな種類の食べ物、あるいは死んだ（死にかけの）人間そのもの、庫倫にいる猛悪なイヌたちの食物はそればかりではない。

この宗教都市においては、仏教的観点から、イヌへの支援が行なわれていた。アメリカの内陸アジア探検家として著名なロイ＝チャップマン＝アンドリュース（1884－1960）の実見談を見よう。かれは、イナディアナ＝ジョーンズ、すなわちインディー＝ジョーンズとして大人気を集めた連作物のヒーローを創り出すさいのモデルにされたといわれる大冒険家でもある（Stuart 1997：115）。戈壁砂漠における恐竜の卵発見は、かれにまつわるもっとも大きな話題だが、その探検報告書にも実に多くの興味ある記述が見られる。それによれば、毎日夕方数人のラマ僧が乗った荷車がやってきて、つみこんだ大樽に入った残飯類を柄杓ですくってイヌどもに与えるという。数十匹のイヌがわめきながらそのあとをおってゆく（アンドリュース 1941：97）。なんにせよ生き物の寿命を延ばしてやること、これすなわち積善というわけだ。1926年、満蒙に流行していたペストの防疫にあたっていたイエットマーは、現地よりの要請によりウルガに出張したが、そのさいの見聞として、モンゴル人たちが群れ集う犬に餌を投げ与えている写真とともに、「モンゴルの聖なるイヌは注意深く守られ、飼養されている」という指摘をしている（Jettmar 1928：Fig. 37）。レーリヒも、イヌが害をなすからといって、その命を奪うことは罪と信じられたので、市の長老たちは、「すべての野犬を巨大な柵内に集めるよう命じ、国費で餌を与えた」という（レーリヒ 1985：180）。イヌは、生きて行くために、自助努力をするだけでなく、明らかに人間に飼養されてもいるのだ。場合によっては、遊牧の民モンゴル独特の食品というべき乳製品製造の過程で出る食べ物を与えられることもある。「シェラストン（黄油。「蒙古牛酪を謂ひ乳皮を加熱して採取した脂油」）を製造し

たときに下層に残った乳漿」を「犬の飼料」とするという記録もある（精 1943：106）。

19世紀前半、清朝の藩部のひとつであったハルハ（いわゆる外蒙古）のチェチェン＝ハン部中右旗（現在のモンゴル国ドルノド＝アイマク）を治めていたのは、1821年、24歳にして父より旗長を継承したトクトフトゥル（1797－1868）であった。名前の最初の音と、清朝より受けた爵位である郡王の王を結びつけて、「ト＝ワン（王）」と一般に呼ばれる。この時期、清朝の威信の低下とともに、藩部における封建体制がきしみを生じはじめ、ザサクと呼ばれた旗長は、清朝の監察のもと官僚化していた地位から、地方領主として独自の治政をおこないはじめていた。そうした変化に、もっとも印象的に反応したのがト＝ワンであった。1851年、自然災害により大量の家畜が斃死したさい、かれは粘り強い交渉によって清朝より課された自旗への賦役を軽減させることに成功し、政治的手腕を示した。他方かれは、こうした困難な状況をふまえて、つぎつぎに思い切った改革を断行した。そして「最も効率的な遊牧の方法と極端な儉約生活」を徹底させるべく、1853年、俗に『ト＝ワンの教え』と呼ばれる書を明らかにし、牧民の教化をはかろうとした。ト＝ワンのこうした施策については、モンゴル人民共和国時代には牧民を搾取する残酷な封建支配者という評価に傾きがちであったが、現地ではずっと伝承などの形で大功労者としての積極的評価が語り伝えられており、ト＝ワンの改革についての再検討の要が叫ばれている（萩原 1999）。

その『ト＝ワンの教え』にも、乳製品製造の過程で出るものが、イヌの餌とされるとの記述がある。『ト＝ワンの教え』について精緻な解題・訳注を行った萩原守の研究に従って、その「教え」を見てみよう。それは「乳を煮て泡立たせる際に犬の食べる乳かすがついでに出るように、仏法や善行を行なう際に自らの生計がついでに実現するのである」というものである（萩原 1999：268）。前に述べた精の記述や、この「教訓」を見るかぎり、ゲルに住む草原地域の牧民たちも、不可欠ともいうべき頼りになるイヌたちに、きちんと餌を確保していたことになる。

ただし、これとは相違して、イヌは餌など与えられないので、野生の小動物などを自分で見つけて、なんとかしなければならぬという見方もある。1944年4月、東蒙古貿易株式会社につとめる堺六郎は、駐在していたフルンボイルのメヌンタラを出発し、満洲里に向かった。冬のあいだに集めた牛車50台分の毛皮を満洲里に運び、そこで新たな商品を仕入れるためである。その行列には12頭のイヌが従ったが、「仔牛ほどもある犬達なので、旅先で十分に餌を与えられない」。そこでイヌたちは、「我れ先に野ねずみを追いまわし、まるでフットボールの試合を見ているようだった。それとても彼らにとっては、生活のかかっている大切な仕事である。……彼らは野ねずみを捕えて自活している」という仕儀となる（堺 1987:29）。イヌはこの場合、自給自足を迫られるのである。

第2章 都市部の状況

ウランバートルでは、1990年代からの民主化とともに、繁殖力のある外国種のイヌがどっと入りこみ、飼い主の気まぐれにより野犬（や野良ネコ）が激増した。事態に手を焼いた市当局は、1995年になって新しい措置を講じた。すなわち、専門の野犬処理業者がおり、深夜から早朝にかけて市内を巡回、毎日50匹を射殺している。1994年に業者が処分した野犬は8千匹にもなった。一方、一般市民が、野犬を処分して持参すると、イヌ1匹につき500トゥグリク（当時レートで約120円）が支払われる（ネコにも同様の措置がとられ、1匹400トゥグリク）。かなり組織的な野犬対策といわねばならない。その一方、約7万匹もいると推定されるイヌのうち、飼われている犬はその3割にしかすぎない。そうした飼いイヌには、毎月2千トゥグリクの税金が課されることになった。賞金付きの野犬狩りには、もうひとつ、自由主義国としてのおぼつかない歩みを始めたばかりのモンゴルが、かかえこんだ矛盾をなんとかしたいという狙いもある。1990年代まで資本主義経済をまったく経験したことのないこの国では、社会主義からの脱却にとまなう大きな混乱のなかで、めはしの利く一旗組が大手を振って闊歩する一方で、その日の暮

20世紀前半期におけるモンゴル定住地域のイヌの諸相

らしにもこと欠く「絶対貧困者」も無視しがたいほどに増えてきた。月収4,200トゥグリク（約1,050円）以下の階層が人口の4分の1を占めているのである。この野犬狩りキャンペーンは、そうした人たちへの対策をかねているというのである（「モンゴルの動物たち受難 野犬増え退治に賞金・外貨狙いタカ『輸出』」『朝日新聞』1995年3月29日）。

20世紀最末期のこの街のイヌ事情を書きとめているのが、朝日の記事の少しあと、1996年7月から1年8ヶ月日本語教師として滞在した柴達木柳である。1998年1月1日の日記風の文のなかで、野良犬は「ウランバートルの名物」といっていいほど多くいるといい、さらに「この野良犬は人懐っこいのが多く、人を襲ったりするという話は、犬の多さに比べると少ないように思います。それに対し、ゲルなどで飼われているものは、しっかり番犬教育がなされているのか、近づくるとたいい襲いかからんばかりに吠えられます。一度など、大学からの帰り道にゲル住宅地域を一人で歩いていたとき、肩にかけていたリュックを咬まれ」たという。柴達木は、その習性にもふれる。「この野良犬たち、時には通りを五、六匹で隊列を組んで早足で歩き、右へ行ったり左へ行ったり、急に向きを変えて歩き出したりして、警戒パトロールでも行っている」ようだった。新年から2週間くらいでイヌたちは急に減ってゆき、その事情について柴達木は「どうやら野犬狩りがあったらしいという噂でした」という（柴達木 2000：172）。これは先の朝日の記事にあった「専門の野犬処理業者」による「深夜から早朝にかけて」の仕事のなせるわざかもしれない。

1. 北京の例

中国の首都北京市においても、おなじ悩みがあるようだ。「北京市飼い犬制限条例」が1995年5月1日からスタートした。同市では、市民の生活水準の向上と、前年が戊歳であったこともあって、飼いイヌが急増し、飼いイヌをめぐる隣同士のトラブル、イヌの糞や吠え声による環境問題のほか、イヌに噛まれた人も激増した。飼いイヌブームがおこったのに飼い主のモラルが

確立されていないことも事態を悪くしている。

同条例の提案者である北京市人民代表大会（市議会）代表王文学によれば、1993年の北京市の飼いイヌは7年前の3.5倍に増え、94年には20万匹をこえたという。イヌに噛まれた被害者も、それともなって急増、91年には3万人あまり、94年には5万9千人にもなった。このありさまでは、市民の間からイヌを飼うことに反対する声が高まったのも当然かもしれない。

行政の担当者である王はいう。「中国全体で飼いイヌは1億2千万匹、10人に1匹の犬がいることになる。犬1匹1日200グラムの食料を消費するとして、1年間で中国にいる飼いイヌの食料は70億キロをこえる。これだけあれば4千万人の人が1年間食べられる。食料が必ずしも十分でない中国で、この膨大な浪費は問題だ」と。

飼いイヌ取締りに関しては、すでに1980年11月制定の「関于控制和消滅狂犬病的通知」「家犬管理条例」が全国的に施行されている。狂犬病防止と野犬狩りを徹底することが大きな狙いであった。その内容を摘記しよう。県以上の都市やその近郊区、新興工業区ではイヌを飼うことを禁止。生産犬（牧犬をふくむ）・科学研究用のイヌ・警察犬などは必ず検疫し、狂犬病でないことを確認する。狂犬病の予防注射を受けさせ、登記させ、「家犬免疫証」を発行する。こうした措置をしていないイヌは一律に野犬と見なし、捕殺しても責任を問われない。イヌが人を傷つけたときは、飼い主を捜しだし、治療費など一切の損失を負担させる。狗皮を売ったときには「家犬免疫証」を返還しなければならない（王 1995：19）。このように、かなり厳しいものである。だが、そうでなければ到底対応できないほどイヌが増えてきたのである。「狗皮」を売ったときの条項があることに注目されたい。1980年代になっても、イヌの皮は一定の商品価値を持っていると見なされているのである（農業漁業部 1989：329）。

95年施行の北京市の条例によれば、重点制限地域（都市部と近郊）では、飼いイヌとしては、猛犬や大型犬は禁止、1世帯あたり小型愛玩犬1匹にかぎり認める。公共場所や交通機関、エレベーターにイヌを同伴することは禁

20世紀前半期におけるモンゴル定住地域のイヌの諸相

止。イヌを屋外に出す場合は、午後8時から翌朝の7時までに限られ、そのさい犬バッジをつけ、首輪でつないで成人が牽くこと。定期的に狂犬病の予防注射をし、市民の平均年収に近い5千元（1元は約10円）もの登録料、年間管理費としても2千元を払わなければならない（王 1995：19）。

まことにきびしい規制といえよう。こうなってくると、飼うのをやめたいと思う人も出てきて当然である。アンケートによれば、なんと7割の人が飼うのをやめたいと思っている。そうすると、単純計算で、さらに14万匹ものイヌが行き場を失うということになる。取締りだけでは一挙解決ということにはならないばかりか、へたをすればさらに事態を悪化させるかもしれないという不安をはらみながらの施行である。

ついでながら、ちょうど1世紀前、最後の中華帝国清朝の帝都時代のこの街においても、イヌは印象的な存在だったようである。1893（明治26）年当時、大鳥圭介公使の代理公使をもかねた参事官としてその地にあった小村寿太郎（1855－1911）が、その街の様子を語った記録によれば、北京の街は、「衛生の何たる必要を見ず」という。「小便は至る処川をなし、又池をなす。為めに行歩注意怠るあれば、忽ち之れに踏み込む。幸いに大便は永く其処に止まら」ないが、そのわけは「豚、犬、人の三つのものにて争ひ片付く。人は犬を逐ひ、犬は豚を逐ひ、互に各々の獲物の多からんを競争す。犬は狡猾に、小児の大便する場合は、傍に待ち居り直ちに平ぐ」というのである（黒木 1941：103）。

大清帝国のお膝元とはいえ、日清戦争の前夜のこの街は、小村にとっては、多くの面で近代都市としての機能が未成熟で、好意的には見られていないが、そうした評価の背景には、このような「聞きしに違わぬ」不潔さがあつたろう。

2. ウラジウォストークの例

人に危害を与える獐猛なイヌが跳梁する光景が見られるのは、都塵をはなれた遊牧地帯や地方の村落だけのように思えるが、実状はそうでもない。

たとえば、シベリアの最東端の都市、ウラジウォストーク（浦潮斯徳）でも類似の処置がとられていた。20世紀になったばかりのこの街についての貴重な見聞を遺しているのは、戸水寛人（1861-1935）である。広く知られているように、戸水は、日清・日露戦争の間の約10年間にわたり、ロシアを公然と敵国視する過激なナショナリズムによって、時代の寵児と目されたオピニオンリーダーであった。1903（明治36）年6月には、東京帝国大学法科大学の同僚らを語らって日露早期開戦を主張するいわゆる「七博士意見書」を桂内閣に建議したほか、日露戦争収拾をめざすポーツマス講和会議に対しては、バイカル湖以東を割譲させる案などをふくむきわめて強硬な論文を発表し、ついには休職処分を受ける。戸水はこれをものともせず、講和条約批准拒否を上奏する挙に出た。ときの東大総長はこの責任を問われて依願退職。やがて事態は、「大学の自治」と「学問の自由」を争点とする文部省＝政府と大学との正面衝突という局面にエスカレートする。バイカル湖にまで日本の勢力圏を設定しようとする戸水の論調から、世間は戸水に「バイカル博士」の異名を呈し、かれは一躍「時代の寵児」となったのである。このときの旅行におけるさまざまな見聞が、翌年以降の戸水のきわめて強硬な対露論の素地になっていることは、そのときの旅行記である『東亜旅行談』の随所に見受けられる。帝大教授の大名旅行とは決していえないような苦勞をとまなう旅行は、戸水に、現地の実状を見ないで主張をなしているわけではないという自信をあたえたにちがいない。ともあれ、戸水の旅行記を見よう。

ウラジウォストークでの見聞として、釘のついた縄で被害者の首をしめ、そのまま引きずったり、斧で頭を割ったりする強盗がいると紹介し、「卑怯ト残忍ハ露西亞人ノ性質」と断じているところなどは戸水の面目躍如だ。このような物騒な有様なので、ウラジウォストークでは、「大ナ商店ニハ必ズ犬ヲ蓄ヘテアル。其ハ所謂蒙古犬又ハ其血統ヲ引クモノデ頗ル獐猛デス。左マデ吠ヘルコト無シニ直ニ人ニ飛付テ噬ムノデスカラ犬ノ傍ニ行クノハ甚ダ危険デス。浦潮斯徳ノ貿易事務館デモ大ナ犬ヲ二匹蓄ヘテアリマシタ。之ヲ蓄フノヲ見ルニ縄デ繫デアル。且ツ聞クトコロニヨリマスト可成暗イ処ニ

20世紀前半期におけるモンゴル定住地域のイヌの諸相

繫デ置ク方ガ善イ。而シテ之ヲ蓄フ人ガ時々食物ヲ与ヘルノミデ他人カラ食物ヲ貰ハセナイ。而シテ夜ニ入りテカラ之ヲ放シテ置クト云フト其家ノ人以外ノモノニハ誰ニデモ噬ミ付ク。此ニ於テ其犬ハ大ニ用ヲ為スノデス。斯ノ如キ蓄方ヲ用フレバ日本ノ犬デモ獍猛ニナルトイフコトヲ聞イテ居マス」(戸水 1903：17-18)。

それより約90年後、社会主義体制崩壊後、極東地域きつての主要都市ウラジウオストークでは、急激に殺人や強盗などの事件が増え、大きな社会不安に悩まされることになる。市民たちの防衛手段は、用心棒代わりに猛犬を身边に備えることであった。さらに悪いことには、番犬にとイヌを飼っても給料不払いなどが常態化している経済状況から、やむなくイヌを手放すものが多く、野犬がどんどん再生産されている事情がある。その当然の結果として、野犬が群をなして人を襲う事件が相次ぎ、パニック状態がおこったのである。ついに1999年1月には、男女それぞれ1人が野犬の群れに襲われ全身に傷を負って噛み殺されるというショッキングな事件が起きた。イヌに噛まれて病院に駆け込んだ市民は6年前の2倍となり、結果として、市民が「子供を外に出すのが怖い。日中でも襲いかかってくる。うちの子供は脅かされて、私は足をかまれた。まったくの悪夢だ！」とインタビューにこたえるような事態になっている。戸水が目撃した約100年前の物騒な時代にもどってしまったともいえそうな状態である。かくしてその街では、警官が野犬を見つけ次第射殺するという対策までとらざるをえなくなった(テレビ新潟 1999)。

さて、満蒙では、宿屋だけでなく、都市部の公共施設においても同様の措置がおこなわれていた。1925年はじめ、オーウェン＝ラティモア(1900-89)は、内陸アジア旅行のため包頭に滞在していた。ある日、その街の駅に泊まったかれは、夜間駅構内の警護に数頭のモンゴル犬が放されるのを目撃している。おりしも中国国内は軍閥分立時代で、治安は極度に悪化していたのであるが、駅で夜明かしする客に建物の外にいっさい出られなくなる不便を強いても、なお有能な番犬を利用する必要があったのである(Lattimore 1995：11)。

おわりに なぜ都市の野犬は存在を黙認されたか

今日まで続いているこうした状況を見るたびに、私たちは不審の念をいだかざるをえない。なぜそのようなひどい状況が黙認され、放置されるのか。本格的に手だてを講ずれば、改善できるのではないか。

たとえば、次のような例がある。1910年、トルコのイスタンブルにおいて、「夥しく放浪する野良犬の処分に困じ果て」、トルコ政府が4万5千頭の捕獲した野良犬を、マルモラ海沖合にあるプリンキポス島そばの無人島に流して、餓死せしめたとは、東洋史学者宮崎市定（1901-95）の報告するところである（宮崎 1986：50）。この野良犬にとっての大災難ともいべき事件の直前、1906年にこの街を訪れた「ほとんど旅行狂と呼ば」れた坪谷水哉は、イヌだらけの様子を「唯だ見る市街到る所、大道にも、軒下にも、また横町にも、何千万頭と無くウロつく者は犬だ」といい、さらに「元來電燈も無く、瓦斯燈も無き市街とて、夜間に街頭を往けば寝ころんで居る犬に何度と無く躓く」とその経験を披露しているが、それらのイヌは「家々の余り物で生活する故、人間に対しては甚だ従順で、躓いても噛み付くことは無い」（坪谷 1911：293）。この種のイヌは、パリア犬として広く知られている。パリア犬は、かつて飼い犬だったが、なんらかの事情によって人から切り離された一種の野生犬である。アジアの熱帯から温帯地域に懸けて広く分布し、野生の度合いも「野生から半野生、つぎに街犬、畜犬というように」種々の段階にまんべんなくわたっている（内田 1957：34）。

都市におけるイヌ対策は、イスタンブルにおけるパリア犬の鳥流しの例のように、断固たる処置を行政がおこなえば、かなりの成果を上げることができる。だが、誰も考えそうなこの種の措置はウランバートルはじめ満蒙の都市では、いっこうにとられない。野犬禍を、やむをえぬ痛みとして、耐えしのほうという選択がなされているのである。

1920年代の訪問者フォーバスは、夜間暗い街路を歩いていて四方から吠えつくイヌの一団にかこまれ、必死で石を投げつけてようやく難をのがれたの

20世紀前半期におけるモンゴル定住地域のイヌの諸相

であるが、モンゴルの街に野犬の群れが非常に多いことに驚いている（フォーバス 1938：131）。ローゼンフェルドは、イヌに噛み殺されるような事件が起こると、集団的な野犬狩りが行われるという。丸太ん棒を持った人たちが自動車でイヌを追いかけるのだと。これは、まさにイヌの「バーソロミュー祭」であると形容しているが、これとても、実際に被害者が出たときにおこなわれる「社会的カムパニヤ」と評されるとおり、都市からイヌを駆逐するという断固たる取り組みというよりは、その場かぎりのものでしかない（ローゼンフェルド 1940：48）。

イヌが「満蒙」の都市部で存在を黙許されるのはなぜか。この点については、考察を別稿に譲りたい。

参考書目

- Andrews, R. C. 1935 *This Business of Exploring*, Putnam, N.Y.
- アンドリュウス 1941 『蒙古平原を横ぎる』内山賢次訳 新日本圏叢書4 育生社弘道閣。
- フォーバス 1938 『新蒙古風土記』高山洋吉訳 育生社。
- 藤村 高 1936 『軍犬と訓練』上巻 興隆社。
- 萩原 守 1999 『『ト・ワンの教え』について——九世紀ハルハ・モンゴルにおける遊牧生活の教訓書——』松原正毅・小長谷有紀・佐々木史郎編『ユーラシア遊牧社会の歴史と現在』国立民族学博物館研究報告別冊20。
- 原山 煌 1991 「モンゴル遊牧民世界に於けるイヌ観念について『元朝秘史』の事例を中心に」畑中幸子・原山煌編『東北アジアの歴史と社会』名古屋大学出版会。
- 春山行夫 1940 『満洲風物誌』生活社（1941年刊の第3版所見）。
- ヘディン 1939 『北京より莫斯古へ』高山洋吉訳 生活社。
- 今泉忠明 2000 『イヌの力 愛犬の能力を見直す』平凡社新書 平凡社。
- 磯野富士子 1986 『冬のモンゴル』中公文庫 中央公論社。[北隆館 1949年]
- Jagchid, Sechen & Hyer, P. 1979 *Mongolia's Culture and Society*, Boulder.
- Jettmar, H. M. 1928 *One Year in a Mongolian Laboratory, 1927, North Manchurian Plague Prevention Service Reports (1927-1928)*, 6, 1928. [呉連徳編『東三省防

疫事務総処報国大全書]]

- 春日行雄 1988 『ウラン・バートルの灯みつめて五十年』 モンゴル会。
- 北原白秋 1942 『小国民詩集 満洲地図』 フタバ書院成光館。
- 小沼正俊 1988 『韃靼 大陸俳句の青春と軌跡』 西三語学研究室（青森県十和田市）。
- コロストウエッツ 1938 『蒙古近世史』 高山洋吉訳 森北書店。
- 黒木勇吉 1941 『小村寿太郎』 国書研究社。
- Lattimore, O. 1995 *The Desert Road to Turkestan*, With a New Introduction by David Lattimore, Kodansha International, N.Y.
- Lessing, F. D. 1960 *Mongolian-English Dictionary*, Univ. Of California Press.
- マイスキー 1927 『外蒙共和国』 上・下 満鉄庶務部調査課編訳 露亜経済調査叢書 大阪毎日新聞社・東京日日新聞社。
- (満洲国) 実業部農林司 1933 『錦県畜産事情』 自印。
- 満洲国警務総局 1982 『極秘 大観園の解剖－漢民族社会実態調査第1編－』 原書房（複製版）。
- マルコ=ポーロ 1970-71 『東方見聞録』 1, 2 愛宕松男訳注 東洋文庫 平凡社。
- 松川 節 1998 『モンゴル歴史紀行』 図説シリーズ 河出書房新社。
- 宮崎市定 1986 『西アジア遊記』 中公文庫 中央公論社。[『菩薩蛮記』(生活社 1944年)の再刊]
- 宮崎武夫 1943 『蒙古横断 京都帝大調査隊手記』 朋文舎。
- 望月 義 1948 『ダライノール』 河出書房。
- モスタールト 1966 『オールドス口碑集 モンゴルの民間伝承』 磯野富士子訳 東洋文庫 平凡社。
- 内蒙大蒙語研 1999 『蒙漢辞典』 内蒙古大学蒙古語文研究室編 呼和浩特。
- 中 雄一 1979 『動物と人間』 日本放送出版協会。
- 中平 亮 1921 『赤色露国の一年』 朝日新聞社。
- 西村時彦(天囚) 1894 『単騎遠征録』 金川書店。
- 農業漁業部 1989 『農牧漁業法規匯編 1949-1986』 同部政策法規司編 農業出版社。
- Palsi 1982 *Memoria Saecularis Sakari Paksi: Aufzeichnungen von einer Forschungsreise nach der Nordrichen Mongolei im Jahre 1909*, bearbeitet und herausgegeben von Harry Halen, Suomalais-Ugrlainen Seura, Kansatieteellisia julkaisuja X,

20世紀前半期におけるモンゴル定住地域のイヌの諸相

Helsinki.

- ポズネーエフ 1908 『蒙古及蒙古人』東亜同文会編纂局訳 同会。
プルジェワルスキー 1981 『蒙古と青海』上下 高橋勝之・谷耕平・田村秀文
訳 原書房。[生活社 1939]
ラムステッド 1992 『七回の東方旅行』荒牧和子訳 中央公論社。
レーリヒ 1985 『アジアの奥地へ 上・西域を行く, 下・チベットを行く』藤
塚正道・鈴木美保子訳 連合出版。
ローゼンフェルド(ローゼンフェリド) 1940 「ウラン・バートル滞在記」中川
訳『蒙古』97。
堺六郎 1987 『シベリアのラーゲリを逃れてーホロンバイルからシベリアへー』
筑摩書房。
西 清 1943 『黒竜江外記』石川年訳 満洲日々新聞社。
精 泰蘭 1943 「蒙古在来乳製品に就て」『蒙古研究』5-1。
柴達木柳 2000 『モンゴル ゲルのくにはっけん!』第三書館。
椎名 誠 1995 『ネコの亡命』文芸春秋。
Stuart, K. 1997 *Mongols in Western/American Consciousness*, The Edwin Mellen
Press.
鈴木茂三郎 1923 『労農露西亜の国賓として』日本評論社。
高久兵四郎 1932 「殖民生活と犬及び狩猟」『狩猟と畜犬』8-6。
竹中翠村(清) 1909 『蒙古横断録』青木嵩山堂。
テレビ新潟 1999 「恐怖の人喰い犬現れる 世紀末か!? ウラジオ大パニック!!」『ロシア極東情報』1999年1月26日 (<http://www.teny.co.jp/russia/ru19981201.html>)
田志和・高楽才 1992 『関東馬賊』東北史叢書 吉林文史出版社。
戸水寛人 1903 『東亜旅行談』有斐閣書房。
東亜同文書院 1932 「旅の印象」東亜同文書院第28期生『千山万里』。
豊田太郎 1928 「満蒙の肺「ペスト」に就て」『日本伝染病学会雑誌』2-5。
1935『満洲の医事殊に伝染病』九大医報特別号 九州帝国大学学友会出版部。
坪谷水哉 1911 『海外行脚』博文館。
内田 亨 1957 『犬の本』法政大学出版局。
梅棹忠夫 1991 『モンゴル研究』梅棹忠夫著作集2 中央公論社。
若松 寛 1993 『ゲセル・ハーン物語 モンゴル英雄叙事詩』東洋文庫566 平
凡社。

王 文挙 1995 「北京市——犬の飼い方変わります」曾慶南（対談）『人民中国』1995年11月号。

本稿は、平成13年度桃山学院大学特定個人研究費の研究成果の一部である。